大阪商業大学学術情報リポジトリ

我が研究の半生を語る－瀧澤秀樹教授に聞く－

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀧澤, 秀樹, 田﨑, 公司, 小田, 忠, TAKIZAWA, Hideki, TASAKI, Kimitsukasa, ODA, Tadashi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/471

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

〔インタビュー〕

我が研究の半生を語る

—瀧澤秀樹教授に聞く—

瀧澤秀樹（比較地域研究所前所長）
田﨑公司（本学経済学部准教授）
（陪席）小田　忠（本学学術研究事務室参与）

田﨑　本日のインタビューの趣旨からお話させていただきます。瀧澤先生は1996年4月の大阪商業大学赴任以来、翌年4月より11年の長きに亘りまして大阪商業大学比較地域研究所の所長を務められました。その間、2000年4月より3年間、商業史博物館館長を兼任され、本学の研究教育環境の整備、充実のためにご奮闘されました。

その瀧澤秀樹先生がこの4月で65歳を迎えられます。また、比較地域研究所所長の重職もこの春で退かれると伺いました。この機会に、先生の今までのご学問、また先生の半生について大いに語っていただく場を設けたいと思い、インタビューを企画した次第です。更には、今後の先生の研究の抱負や日本、アジア、そして世界に発信する社会科学への提言もお聞きしたいと思います。

故郷の影響

田﨑　それではさっそくですけれども、先生がお生まれになりました1943年からまずいろいろとお伺いしていきたいと思います。先生は終戦2年前の1943年の4月に富山県新川郡でお生まれになっていますね。

瀧澤　下新川郡です。

田﨑　下新川郡の、現在の黒部市になるわけでしょうけれども、当時の三日市町の若栗でお生まれになっていらっしゃいます。これは後日に知ったのですけれども、先生のお母様の実家は真宗のお寺さんだということと、それから先生自身が「真宗王国」と呼ばれる富山という地域の中で幼稚園の時からキリスト教に接していたということ。

そして富山県自体が日本で一番豊かであり、そして教育環境におきましても最大級の進学県というふうに知られている。そういった地域でありますので、そういうところから先生にお話を伺いたいと思います。

瀧澤　富山県が日本で一番豊かだというのは違います。富山県は雪が多く、水田稲作単作の貧しい県です。「幕末マニュファクチャー段階」などとも縁の遠い地域ですね。ところがハングリー精神がありまして、文化の乏しい分金を稼ぐのに熱心なので両脇の新潟、

石川両県に比べたら富山県の人は金があるというふうに思われている。しかし、実はこれといった文化も知的遺産もない土地です。県庁所在地の富山市に金沢の兼六園や高岡の古城公園に相当する公園もないのが、象徴的でしょう。だから私はいわゆる郷土愛とか郷土への誇りというものはほとんどない人間で、小田さんも私との長くてかなり濃い付き合いになると思うけど、私が故郷を自慢したとか、そういうことは多分ご記憶にないでしょう。

それはそうとして、私の父親が今から35年前に65歳で亡くなりました。私は今年まもなく65になります。私の父は65歳と1ヵ月で亡くなったので、私はだいぶ前まで僕の人生も65と1ヵ月で終わるのかなと思ってきたのですけれども、もう目の前まで来ています。何かと病気がちの私には、自分の長寿というイメージを持てなかったのです。今のところもう少し長く生きられそうなのですが、65歳を機会に私もこれまでのことを振り返ってみたいという気になりました。

それから、比較地域研究所の所長の任期も19年度で終わるということで、その意味もあって私の研究生活を振り返りたいと思いました。日頃親しい田﨑先生にお会いしてお願いいたしました。研究所の仕事をずっと一緒に続けて来た小田忠さんにも同席していただきました。ありがとうございます。

田﨑　こちらこそありがとうございます。さっそくですが、先生のご家族は非常にアカデミズムに満ちている、そういったお家柄なのですけれども、その中でご両親、またはご兄弟、または近々の方々からの影響というのはどうだったのでしょうか。

私にとっては、先生がまさか一橋大学名誉教授の安丸良夫先生、日本思想史の大家ですけれども、その先生とほとんど郷里を接するところで育ってきたということにつきましては本当に驚きだったものです。安丸先生は、自己の学問的原点を郷里に求めてらっしゃいます。そういったものを瀧澤先生がどのように吸収されながら、しかしながら郷里に対しては一定距離を置くという生き方をされてきたのはどのようなわけなのでしょうか。

瀧澤　安丸良夫先生についていいますと、安丸良夫先生は私の二番目の兄と知り合いなのです。兄が一橋大学におりましたので、二人で故郷についてよく話題にしたと言うのですが、実はえらくローカルな話になりますが、富山県というのはちょうど一番真ん中に、富山市のすぐ西のほうに呉羽山（くれは）という、山というか丘陵があります。その山を挟んで東を呉東と言います。西を呉西と言います。この二つの地域は一つの県の中にありながら非常に激しい対抗意識を持って来た地域です。

安丸先生は西です。私は東です。私自身には呉西への対抗意識はありませんが、そんなわけで、安丸先生のお仕事は大変尊敬しているけれども、同郷の人間としての親しみとかそういうことも実はないのです。例えば政治家の松村謙三さんに対してもそうですね。戦後の農地改革の指導者として尊敬する人ですが、「同郷の偉人」という感覚はありません。水をさすようですけれどもそういうことです。

田﨑　はい、わかりました。先ほど聞きそびれてしまったのですけれども、幼稚園の時からキリスト教にかかわりを持って育てられたということはどうですか。

瀧澤　それは、時代というのが影響しています。私の生まれた2年後には日本は戦争に負けます。空襲を避けて黒部の母の実家に寄食していた家族は、父の職場のある富山市に

移りました。焼け野原の風景が、私の記憶の原点です。そこに米軍が進駐してきます。空襲で焼けた町に進駐軍の印象は非常に新鮮です。

私の母親は真宗のお寺の娘でした。私の母方の祖父というのは私が生まれる前に亡くなっていましたが、「暁烏敏の弟子」を名乗る非常に面白い人だったみたいで、自分を最後として自分が死んだら寺を解散しろという遺言を残して死にました。そして、本当に解散したのです。ああいう真宗王国と言われる農村で寺を解散するということはかなり大変なことなのです。村の人たちからすれば、共同体に対する背信みたいなものがあります。

そこで私の母親なんかは、今まで正しいと思っていた価値観がガタガタになってしまった。さらには米軍がやって来たらとんでもないことをすると恐れていたのが案外何もしなかった。むしろ食糧を分けてくれたとか、私たちも進駐軍が投げるガムを拾うためにジープを追いかけた記憶があります。

そういうことで私の母親はそれほど期待感もなしに、何か新しいものに子どもたちを触れさせたいという思いで私の妹と私の二人を、当時のちょうど幼いころキリスト教の幼稚園が私の家のすぐ近くに、幼稚園も空襲で焼けましたから、富山中部高校という高校の教室を借りてやっていたのでそこに送りました。たまたま私たちが住んでいた長屋の隣にその幼稚園の先生が住んでいたということもありました。

それで私の、二番目の兄も、幼稚園は行っていないのですがキリスト教の教会に通いました。一番上の兄は関係なかったのですが、下の三人が幼稚園なり教会なりに通うようになりまして、今私が65歳ですが、だから60年間ぐらいキリスト教との接点があるのです。妹も兄も途中でやめまして今キリスト教会とは何の関係も持っていないのですけれども、私一人だけがどういうわけかいまだに続いている。きっかけはそういうことです。

田﨑　はい。ありがとうございます。そういった中で有数の進学県であります富山県で中学校、高校をお過ごしになられまして、最終的に東京大学に進学されるということなのですけれども、その間に自分自身が将来どういうものをやりたいのか、どういうものになりたいのかというような夢はございましたでしょうか。

瀧澤　進学県というのは確かにそうなのです。ごく最近の数字は知りませんが、人口当たりの東大進学率が非常に高い県なのです。特別の私立の進学専門校があるわけでもないのに、そうなのです。それに比べて京大進学者が不自然に少ないのも、特徴でした。それは先ほど申し上げたハングリー精神と関係があると思うのですが、ただ私の履歴を詳細に検討されたらわかりますが、私が出たのは富山で一番の東大進学校ではないのです。私の通っていた高等学校は今現在でも富山県で三番目です。

これは簡単な理由で、私の父親が教員でして、富山高校という、昔の富山中学の教員だったことがあるというだけです。富山中部高校は昔は神通中学といいましたが、私の住んでいた小さな、戦後急造のバラックの長屋だったのですが、そこから歩いて1分でした。富山高校までは市内電車を乗り換えて30分です。町外れです。それでもそこに行くのは親父が「行け」と言ったからです。「あそこのほうが名門だ。行け」と言ったからです。

しかし本当に東京大学を目指すことだけが目標であれば、そこには行ってなかったはずです。だから何か親父の旧時代の人間の見栄というか、あれは目の前にある良い大学へ進

学するための高校進学というよりは、伝統のあるところに行かせたいということだったのだろうと思います。

田﨑　いわゆる旧制富山中学にあたるわけですね。

瀧澤　そうです。

田﨑　ちょうど先生が高校時代を過ごした時が60年安保ということで、当時の時代状況の中でどのように自分自身が生きるべきかというようなことを考えられましたでしょうか。

瀧澤　60年安保は高校2年の時です。その年に二番目の兄が東大に入っていました。ですからちょうど1960年は彼が1年に入った年です。それで国会突入の時には駒場（東大教養学部）の自治会委員長だった西部邁（にしべすすむ）に「突入しろ」と号令されて突入した世代です。樺美智子さんが死んだその現場のすぐ近くに居たのです。私はその兄の影響もありまして、とにかく今日本の社会で起こっていることは、学生や市民が正しくて政府、特に岸首相が悪いのだと、もう無条件にそういうふうに思い込んでいました。

私の両親もそうでした。ただ母親は無茶なことして怪我なんかしないでということばかり心配していました。政府が悪いのだと言っていました。私も深く考えないでたぶんそうなのだろうと思っていました。ただ、私は今でもスポーツとは縁がない生活なのですが、体が弱かったのです。だから例えば、反政府運動に身を挺して何かやろうという気は最初からなかったです。

田﨑　そういった中で、東京大学の文科二類に入学されるわけですけれども、法学部に進む文科一類ではなく、文科二類に進路を決定したというのはどういった意図があったのでしょうか。

瀧澤　私の年から旧文科一類が文科一類と文科二類に分かれるのです。それ以前は両方文科一類だったのです。文科二類は主に文学部だったのです。それが文科三類になりました。あの当時の雰囲気は今の人には分からないかも知れないけれども、文科一類が一番上で、その次が文科二類。文科一類から法学部に行けない人が、経済学部に行くという雰囲気があったと聞きます。私らの学年からそれがなくなったので、文科二類に入っても法学部に負けるという意味ではないという、自負心がありました。それと正直言いますと、私の一番上の兄がそのころ事実上の失業者でした。ドイツ文学を志して地元の富山大学を卒業した後、九州大学の有名な高橋義孝先生の弟子になったのですけれども修士を了えても就職がなかった。非常に苦労していました。家も貧しかった。そういうところで就職がなく、この家が大変なのにということで家の中でいろいろトラブルもありました。私は親に苦労をさせたくない。だから大学院、学者というようなことは最初から考えないで、企業に入って安定した職を得て親を安心させたい。だから経済学部だ、それであれば文科二類だということです。

東京大学での転機

田﨑　はい。そういう背景で入学されたわけですけれども、2回生の時の駒場キャンパスの2年目で、経済学部の教授が教養課程で講義をする、持ち出し授業で大塚久雄先生の

授業に出会うわけですね。その時のインパクトというのはどうだったでしょうか。

瀧澤　正直言いますと、あれが私の人生の大きい転換点になります。私は大塚先生という人は知らなかったのです。そして私はある程度マルクス主義のものを読んでいましたから、大塚久雄というのはプチブルの悪い思想家であるというふうに先輩たちの意見を聞いていました。あれは何か一種の霊感みたいでした。当時の私は、友人数人とどの講義も最前列中央の席で受講していました。大塚先生は松葉杖をついていましたから、教室の入口で学生が静かになるのをちょっと立って待っていらっしゃった。その姿を見た途端に預言者に出会ったみたいだった。頭の中でビーンと音がした。それからの半年はもう夢中でした。変わってしまいました。社会科学の内容にひかれてそうなったというよりは、本当に呼ばわる者の声、預言者に出会ったような気持ちになった。ちょっと説明できないです。

田﨑　大塚先生は旧制三高、のちの京都大学教養部、今は、総合人間学部なのでしょうか。そこにいた時に左足にけがをされたとお聞きしたのですが。

瀧澤　いや、違います。大塚先生がけがをされたのは東大の教員になってからです。

田﨑　東大時代のことですか。

瀧澤　東大です。あの先生は戦中の混乱期に東大に行くための満員バスに乗っていて、そしてバスから降りる時に先生の上にガーッといっぱいの人が折り重なって落ちて、その時にけがをされたと聞いています。そして入院して足を切るか。切らないことも可能だけれども、病院にいると連日の様に米軍の飛行機が東京を空襲していた時代ですから、それだったら切って疎開したほうがいいかというふうに決心されたと聞いています。

田﨑　失礼しました。大塚先生は無教会派の内村鑑三からキリスト教信仰に導かれるわけですね。そして当時では珍しかったのですけれども大学院に進学し、その後、法政大学から東大に戻られ、戦後に大塚史学というものを体系化されるわけです。先生が最初に出会ったころの大塚先生というのは駒場でどのような授業をされていたのでしょうか。

瀧澤　無教会派の集会での直接の指導者は別の人だったと思いますが、思想的には「内村鑑三の弟子」と言えるでしょうね。大塚先生は当時何歳かというと、東大の定年は60歳だから、私のマスターの2年で定年でした。だからその時は55歳だったのではないかと思います。経済史、後期集中の4単位でした。先生の書物では、『近代欧州経済史序説』『近代資本主義の系譜』などにまず魅せられました。それから『欧州経済史』という新しいテキストを買いました。

大塚先生は文章もすごく面白いけれども、あの先生がしゃべると、見てもいないスペインの無敵艦隊とイギリスの艦隊が戦争をして、スペインが負けて逃げていったというのが目に見えるように話すのがうまいのです。

田﨑　それから本郷の経済学部に進学されて、本郷にはご存知のように山田盛太郎先生の系譜を引く講座派の人々、または大内力先生らの系譜を引く労農派や宇野経済学の方々、もうそうそうたるメンバーがいるわけです。他の先生方には目を移さないで大塚先生だというふうにお決めになっていたわけでしょうか。

瀧澤　それは、やはりキリスト教の要素が大きかったです。私はそのころからたぶん10年間ぐらいキリスト教とマルクス主義の間で思想的に悩んでいたのですが、大塚先生にあ

こがれた要因の一つがキリスト教です。ただし、キリスト教を理解しなければ大塚先生の学問を理解できないという言い方には反対です。私はそれとこれは一応、別のものであると思っています。ただ、私がどうするか悩んだのはその年は関口尚志先生がゼミを始められた時で、関口先生は大塚先生の直系弟子だからどうしようかなと思ったのです。その時に関口ゼミに行ったのがいまやタイ研究の大家となった親友の北原淳君です。彼も経済です。北原君らがその時に悩んで向こうへ行きました。アメリカ経済史の秋元英一さん。秋元さんもその時には関口ゼミでした。その学年の大塚ゼミでは、大学院に残ったのは結局私だけになりました。

田﨑　大学時代、大学院時代と通じまして影響を受けた先生は大塚先生が一番だと思うのですけれども、そのほかにも当時の東京大学には、丸山政治学、それから川島農村社会学という大きな社会科学の体系があるわけです。そういったものを経済学部または経済学研究科にいてどのように摂取されたのでしょうか。

瀧澤　川島武宜先生は『日本社会の家族的構成』とか『イデオロギーとしての家族制度』とか、そういう書物を読ませていただきましたけれども、やはりそれは学問としてであって、あの先生の持っている思想の体系にあこがれたということはなかったです。

丸山眞男先生にはちょっとというより、大変興味がありました。その点は小さな問題ではないので、可能なら後でもう一度、話題にしたいと思います。もう一人、実は非常にあこがれた先生は隅谷三喜男（すみやみきお）先生です。隅谷三喜男先生は大塚先生とは近いようで近くないようで人格的な距離は微妙な方です。無教会派ではないクリスチャンでした。駒場時代に、下北沢近くの当時の下宿に近い日本キリスト教団の教会で隅谷先生の講演会があり、聴きに行ったのが、直接おめにかかった最初です。人格的にはお二人は仲が良かったと思います。私は実は、日本蚕糸業のテーマを選んだのには、隅谷三喜男先生の『日本賃労働史論』という本で明治時代の諏訪製糸工女について知った影響が非常に大きいのです。日本の近代化を外貨獲得の面から支えたのが、貧しい農村出身の「家計補助的賃労働」だったというわけです。彼女たちの労働と生活の実態を知りたいと、真剣に思いました。私の最初の書物、『日本資本主義と蚕糸業』をご覧になれば、ある程度理解していただけるだろうと思います。あの本が出たとき、塩沢君夫先生が『朝日新聞』読書欄で紹介して下さって、「製糸工女に関する部分は一般読者にも読んでほしい」と書いていただきました。大変嬉しかったですね。

田﨑　ほかに同時期にはドイツ史の、後に義理の兄弟になられると思いますけれども、柳澤治先生とか奈倉文二先生とか、そういった方々なんかも研鑽されていると思うのですが、同じ院生または学生との間で学問研鑽はどうだったのでしょうか。

瀧澤　奈倉文二君は学部時代からの親友の一人です。思想的には彼らと差があるけど、安良城盛昭（あらきもりあき）先生のゼミにいた沢井勝君からはいろんな事を学びました。今は地方自治の専門家だけど、当時は尊徳仕法研究に没頭していて、資料の精密な読み方、マルクス主義思想の体系的理解など、個人的な指導者のような存在でした。昨年、大商大の大学院に非常勤で来ていた彼と、何十年ぶりに再会しました。柳澤治先生とお付き合いができるのはもうちょっと後です。大学院に入ってからです。それからインド経済の専門家として有名に

なる弟の柳澤悠(やなぎさわはるか)君が私の1年下です。柳澤君は隅谷三喜男さんのゼミですから、広い意味では講座派だけれども、大塚ゼミとは、指導者の学問体系がマルクス主義哲学が背景ではないという共通点があります。そういう人たちとわりと親しかったです。

学問的視点の確立

田﨑　同時に先生の5級上になると思うのですけれども、石井寛治先生が、もう助手になられていまして、その時に1963年東大に戻られました大石嘉一郎先生を中心に、産業革命研究というのが隆盛を極めるわけです。そういう意味では先生はその世代からはちょっと離れてしまった世代だというふうに思うのですけれども、そういった産業革命研究を一方で研鑽している人達の後にどのようなかたちでもって、大塚史学をベースにしながら日本資本主義または蚕糸業の研究をやろうというか、志そうと思われたのでしょうか。

瀧澤　何か大した考えを持って自分の道を選択してきたというよりは、いろいろな偶然が作用していると思うのですが、あのころの東大大学院を考えるときには、私には彼を抜きにして考えられないのは安良城盛昭先生です。

マルクス主義、正統派のマルクス主義で、しかも非常に魅力的な人で、今おっしゃった大石嘉一郎先生とも無二の親友で仲の良い方でした。その後いろいろありましたけど。ともあれ、今でも私は安良城先生の学恩は忘れられません。それはともかく、産業革命研究史研究の人たちと私は結局は同じ流れには乗らなかったです。やはり、たぶん大塚先生の周りにいたからでしょう。

それから石井寛治さんとの付き合いは大学院に入ってからです。大学院に入って、しかも蚕糸業のことを始めたので、石井寛治先生の指導を受けたら良いというアドバイスを受けて訪ねて行きました。石井先生はご承知のように、本当に素晴らしい人格の先生でした。

あの先生はだれの弟子だから分け隔てをするということはまったくない人で、ずいぶんいろいろ、私生活の面でも親切にしていただきました。大学紛争の渦中での当時の石井先生を想い出すと、涙が出るほどです。でも、私は例えば、石井寛治先生や山口和雄先生の弟子だと思ったことはない。むしろそういう点で言えば大塚久雄先生から見た楠井敏朗さんの弟弟子だという意識です。

田﨑　それと同時にですけれども、産業革命研究が日清、日露戦争のところに産業革命を、後進資本主義の確立をどのように設定するかということで、やはりいろいろな無理というかひずみもあったと思うのです。

私は先ほど挙げられた先生の最初の著書『日本資本主義と蚕糸業』を読んだ時に、古島敏雄先生、また中村政則先生がやはり農村を巻き込んだかたちで、どのように一国の資本主義、後進国日本の資本主義の成立というものを考えるのかということを議論されていた内容について真剣に考えられて、ある意味ではそれに対抗する形で議論をされたのではないかという感想を持ったことと、あとこれも本当に邪推なのですけれども、神山茂夫理論の中のボナパルティズム的な把握、そういったいわゆる権威主義、つまり絶対主義的天皇制ではない資本主義のそういった統治形態の在り方の問題として、日本資本主義像を再構

成されるのかという、強烈な問題意識を感じましたけれども、その点についてはいかがでしょうか。

瀧澤　僕の研究の筋道から言えば、大塚久雄先生が産業革命史研究のあの人たちに、実は本心では対抗する意味で、あれは僕の修士課程１年の時、1966年に「産業革命の諸類型」という題で、土地制度史学会で発表されました。

あれはマルクス主義的な、つまり大石嘉一郎さんや、彼らの産業革命史研究とは違うということを言いたかったのだと思います。私はやはりそちらの影響が圧倒的に強かったです。私にとっては日本資本主義がどの時点で確立した、成立したということは実はどうでもいいことでした。それよりもその中で、その成立した時点で日本の民衆の編成、階級的な編成を含めてそれがどうなっていたのかということを私なりに理解したいと考えました。

私の『日本資本主義と蚕糸業』という本もやたらと量ばかり大きい本なのですが、主な関心は講座派的な地主制の問題、それから労働者階級の形成に関して、この辺はまっとうなマルクス主義とそんなに離れていないのです。それを講座派的に理解するのではなくて、大塚史学の手法で理解しようとした。ちょっと説明が難しいですがそんな感じです。

田﨑　『日本資本主義発達史講座』刊行50年のシンポジウムの時に大塚先生に初めてお会いしました。日本の資本主義というのは鉄の機械じゃなくて木で「機械」ができているから「器械」なんだということと、あと大塚先生自身がウクラード論や共同体というものをベースにしながら、資本主義経済制度というものが、現実には横倒しにされたかたちでもって世界の現段階を作っているという、そういった議論の中で後進資本主義をどのように考えるのか。そんな強烈な発言をされていたというのも非常に心に残っておりました。

瀧澤　私の『日本資本主義と蚕糸業』という本について、今の私だったらあんなことは書かないと思うのは、日本共産党という党の名前は出していないのですが、戦前の日本共産党をめぐるテーゼにおける地主制の規定が変遷してきたということを相当詳しく議論している。あの議論には意味がなかったというのが私の考えだったのです。そういう議論を僕たちはいま越えようではないかと、そこで言いたかったのです。

田﨑　それはよく分かりました。すなわちコミンテルンの27年テーゼでもう日本は資本主義になったのだから、これからは社会主義革命のはずだったのに、32年テーゼではまだまだ絶対主義なのだから市民革命とされる。問題はそういったテーゼと学問が緊張関係を持たずに、そのテーゼをいかに学問的に補強するかというわけです。

瀧澤　僕にはそれは違うという意識がありました。

田﨑　同時に、当時先生が大学院に行かれたときには、ちょうど進学されたときが東大紛争真っただ中ですね。

瀧澤　修士論文を出した時が医学部の処分問題でした。ですから、東大紛争が本格的に燃えるのはドクター1年のときからです。私はだからドクター1年の夏から勉強出来ていない。マスターのときは、まあ普通に勉強できたと思います。私の1年後、さっきの柳澤悠君の代は修士論文を出せなかった年です。東大紛争については、その渦中にいたわけだから「何が問題になっているのか」程度は理解していたつもりですが、同じ時期に隣の中国で展開している「文化大革命」はさっぱり理解できなかった。「どうせ勉強できないから」

と、あの頃は毛沢東やレーニンの著作を集中的に読みました。「レーニンの『アジア社会』観」という論文を書いたこともありました。

田﨑　修士論文を胸を張って出せないのは、ずっと我々の時代まで続いておりまして、大変な状況だったと思います。

ところで先生の蚕糸業史研究は埼玉県をフィールドにされていました。それもその間のいろいろなご事情があった中で選択されたのですか。

瀧澤　それはそんな深い理由はないです。実は埼玉は蚕糸業では相当重要な地域であるにもかかわらず、山口和雄先生の編集された『日本産業金融史研究・製糸金融篇』というあの大部な本の中で埼玉県が扱われていないのです。それから副次的な要素だけれども、東京から近いから調べやすいのではないかという気持ちもありました。

田﨑　分かりました。そういった中で日本の蚕糸業は同時にキリスト教を生み出す風土にもなっているわけですし、受容する基盤にもなっているわけですね。

瀧澤　それは隅谷先生がおっしゃっていた。工藤英一先生の書物もありました。

田﨑　その問題も意識されながらやっていらっしゃったのですか。

瀧澤　それを意識したのはもっと後です。たしかにキリスト教は多少は蚕糸業と結び付いた形で明治前期の群馬県などでかなり広がるけれども結局、消えていくのです。キリスト教が都市インテリ層の宗教になって、農村教会は消えていくのです。本学の片野眞佐子先生が研究していらっしゃる柏木義円の安中教会はまさにそれなのですけれども、それがその後続かないんです。当時の私はその問題を特に意識してなかったと思います。一部で偶像視する人もいたけど、クリスチャンであることを売り物にした郡是製糸の波多野鶴吉などは、製糸資本家の利益のための工女教育をした人物という程度にしか見えませんでした。

田﨑　大塚史学の先生方で関口尚志先生の薫陶は受けられたということなのですけれども、そのほかの岡田与好先生とか毛利健三先生とはお付き合いはなかったですか。

瀧澤　あまりないです。岡田先生には、社会科学研究所にいらっしゃったのでいろいろ教えていただくチャンスはありました。ただ岡田先生や東北大学にいた吉岡明彦さん、それから福島大学にいらした樋口徹先生。あの人たちはいわば大塚左派というか、大塚史学の中に入り込んだ、大塚史学の中の講座派だと思えていました。彼らは市民社会とかエートスとか、大塚先生から一番学ぶべきところを拒否していた人たちのように、私には見えました。

ただ石坂昭雄さんは違った。彼は逆に何か大塚史学というよりは、極端に言えば大塚教信者みたいな感じというか―。とにかく、私には大塚先生の弟子の中で、あの岡田与好先生に代表されるような人たちの議論には反発のほうが強かったです。勿論、学者としての実力と人格を尊敬しながら、です。一方、山之内靖先生に対しては「崇拝」に近い感情を抱いていました。平田清明氏の『市民社会と社会主義』が大学街でベストセラーとなる思想的潮流から、無意識のうちにも何かと影響をうけていたことと、関係があったかも知れません。

田﨑　先ほど安良城盛昭先生の話も出ましたけれども、当時の日本経済史を担当されていた安藤良雄先生はちょっと時期的にはずれると思うのですけれども、どのような指導を

受けられたのでしょうか。

瀧澤　安藤良雄先生は、形式的には大学院での私の指導教授でした。日本経済史を専攻した私は、制度的には西洋経済史の大塚先生を指導教授にできなかったのです。私の大学院入試合格のあと、大塚先生から安藤先生に「よろしく頼む」と一言があったはずです。ただ正直に言ってしまうと、良い人だし優しい人だけど、学問的に安藤先生の影響を受けたという意識は殆どないです。

田﨑　ほかに東大時代の思い出の中で、もし、話し残したものがありましたらお願いします。

瀧澤　大学紛争が始まりましてから、それまでお互い仲良くしていた、特に共産党系の人と、全共闘に行った人たちとの間の人間的対立が極端なところまでいきまして、そのために非常につらい思いをしました。私は全共闘で頑張った人の中にも非常に親しい人がいます。逆の側はもちろん、そちらのほうに私の人脈は強かったです。

でも、あの殺伐とした雰囲気が嫌でした。早く東大を逃げ出したかったです。だから、石井寛治先生からだったと思うけど、甲南大学で助手を募集しているという話があったときに、ほとんど何の疑いもなく、とにかくここを逃げ出したい。その動機でした。

甲南大学の思い出

田﨑　では続いて甲南大学時代に話を移らせていただきたいと思います。甲南大学の助手は日本経済史での公募だったのですか。

瀧澤　そうです。甲南大学経済学部始まって以来、初の公募だったのです。公募だったから、就職した時点であの大学に私の知り合いが1人もいなかったです。経済学部はほとんど京都大学出身の人たちが占めていましたし、私はとにかく逃げ場を探して行ったのです。結果的には、あそこでは大変良い雰囲気で勉強しました。学士院賞を受賞された大山敷太郎先生の後任の形だったのですが、大山先生が私の研究に干渉されるということも、全くなかったのです。

田﨑　そのとき甲南大学に、イギリス鉄鋼史の高橋哲雄先生、そしてJ・S・ミルと河上肇の両方を語られる杉原四郎先生、労働経済学で熊沢誠先生といったそうそうたるメンバーがいらっしゃったわけですけれども、そういった先生方からどのような学問的な影響、薫陶を受けたのでしょうか。

瀧澤　私は当時の甲南大学経済学部というのは、非常に素晴らしいところだったと思うのです。つまり、そういう意味ではそれまでいた東京大学と全然違うのは、講座派であるとか労農派であるとか大塚史学であるとか、そういうことで人を差別したり遠ざけたり、特に自分たちで群れを作ったりという、そういう雰囲気が全くなかった。

当時甲南の経済学部にいた人たち、杉原四郎先生は私が行ったのと同じ年に関西大学から移られ、その後、2、3年後には、京都大学から田中真晴先生がいらっしゃった。ほとんどが京大出身の方なのに東大出身者に対する対抗意識みたいなものを示す人はいなかったのです。

実は行く前はそれをちょっと警戒していたのです。あそこは殆どみな京大だから、東大から行くと多少そういうことがあるかなと思ったのだけれども、それは全くなかったです。その中でも高橋哲雄さんと森恒夫先生。森先生は珍しく東大出身だったけど、あのお二人には私生活に至るまでとことんお世話になりました。熊沢誠さんの学問と人柄も、魅力的でした。本山美彦さんはちょっとスタンスが違うかなと感じましたが、間もなく彼自身が京大に移りました。

ともかく、学問的にも、あの先生たちは「若いうちに頑張って本を書け」と、「本を書くのだったらこういう出版社を紹介してやる」とか、そんなことを非常に熱心にやっていただきました。私の最初の本は未来社ですけれども、あれは杉原先生の紹介でした。

ですから、そういう点も含めて非常に幸せでした。勉強すること、論文を書くこと、本を書くことが学者の本来の仕事であって、そのためには若いときに大学行政なんかはあまりやらないほうがいいという人たちでした。実際に最初の数年は一切の「雑用」から解放していただきました。しかも、さっき言いましたように学閥とかシューレとかいうことをほとんど気にしない人たちでした。なおかつ個人的に優しい人たちでした。例えば高橋哲雄先生なんかは当時から40年近くも経った今でもそういう人です。幸せでした。

田﨑　高橋先生はご存知のように、最初はイギリスの鉄鋼業で学位論文を書かれながら、スコットランド、アイルランド、思想史ではないですけれども文学や風俗・地誌、ありとあらゆる面にその触手を伸ばされています。杉原四郎先生も、本当に杉原先生の専門とする学問というのは何だろうというふうに思うくらい多彩な先生です。

そういった意味では、しっかりした、中心的な自分の学問研究がありながら、ゆるやかに、伸びやかに学問を進めていける、そんな環境の中で先生のご研究も新たなかたちで開花したと思うのです。

瀧澤　私が甲南大学からこの大学に移籍したのも高橋哲雄先生の推薦によってですし、実は高橋先生と行動を共にしたのでした。甲南大学経済学部が、私が赴任した頃とはかなり雰囲気が変わったという、共通の思いもあったと言えます。杉原先生について言えば、甲南大学に行って間もない頃、一度「家に遊びにおいで」とおっしゃっていただいて、遊びに行きましたら「うちの息子だ」と言って紹介されました。

田﨑　薫さんですね。

瀧澤　薫さんとその弟の達さん。当時高校生だったその2人が、研究者として今あんなに素晴らしい業績を挙げている。懐かしいですね。

思想との格闘時代

田﨑　同時期に刊行された安藤良雄先生の還暦記念論文集の中で「内村鑑三と国民経済」の論文が出るわけですね。あれは僕自身読んでみてちょっとびっくりしてしまったわけですけれども、内村鑑三への注目というのは、それは大塚先生との関係ということ以上に何があったのでしょうか。

瀧澤　日本のキリスト教思想史の中では、内村鑑三というのはやはり抜いて考えられな

い人です。ところが内村鑑三については日露戦争に反対したとか、足尾鉱毒事件について運動に加わったとか、それから教育勅語に敬礼しなかったとか、そういうそれぞれの局面で大変有名なのだけれども、内村鑑三とは一体何を考えていた人なのかということについては体系的には意外とあまり知られていないのです。

私は1978年春に最初の本を出すのですが、原稿は1976年の秋に完成していたのです。その時点で未来社からの刊行も決まりました。それでいったんこれを完成して、その次に何を研究するかという時に、しばらく遊ぶ時間がありまして、その時に集中的に内村鑑三を読んでいるのです。その時に安藤良雄先生の還暦論文集の話があったので、「これだ」と思って書いたのです。

田﨑　それと同じ頃の論文だと思いますが、これは私が大学時代にテキストとして使わせていただいておりました『近代日本経済史を学ぶ』では産業貿易構造の部分を担当されているわけです。それが、なぜか二つぴったりと結びつくところにちょっと驚きを禁じ得なかったのです。同時に、その時に先生は内村鑑三、親鸞、なぜかキリスト、レーニンというものをそぞろに載せながら本当に自由に思想史を楽しんでいらっしゃるというか、経済史と思想史の交錯をいろいろ模索されていた、そういった時期だと思うのです。

瀧澤　楽しんでいたというよりは、あの頃は非常に苦しんでいたのです。先ほど少し触れましたが、私には研究生活のスタート時点から「キリスト教とマルクス主義」の間での思想的葛藤がありました。それに加えて、丁度あの当時は私の個人的な生活においても、非常に紆余曲折があった時代で苦悩や苦労が多かったのです。ですから、何かそういう現状から脱出するきっかけをつかみたかったのです。急に親鸞が吸ったであろう空気を私も吸いたくなったということで、京都の六角堂までいきなり行ったりしたのです。そういう時期がありました。

田﨑　同時にキリストや対極に位置するレーニンを対象とするというその取り合わせは一体何だったのでしょうか。

瀧澤　私の思想の骨組みとなっている四人の巨人というか。『イエスと親鸞』という本を後に出しますが（1986年）、その原稿を実際に書いたのは、あの頃です。ですからあれはちょっと恥ずかしいことですけれども、テーマは私の中にあるエロスの領域なのです。イエスは女性を愛したことがあるのだと私は思いたかった。同じ問題が親鸞にもあった。「親鸞における恵信」は「イエスにおけるマグダラのマリア」だと思えました。レーニンのそういう問題について私は知らないのです。あまり語られていないから知らないけれども、特にパウロやイエスや親鸞についてはその問題だったのです。あのころは楽しんでいたというよりは非常に苦しんでいた時代です。

田﨑　同時に私がいろいろな論文を読んでいた時に、当時の先生の手になる、全く驚くべき内容の論文がありました。我々の時代にとって大石嘉一郎三羽がらす、すなわち石井寛治、高村直助、それから中村政則の三先生ですね。その三人は本当に神様みたいな存在であったわけです。特に中村政則先生については自分のことを「最後の講座派」であると公言しつつ、1982年の時の『日本資本主義発達史講座』50年のシンポジウムの後も、唯一孤塁を守るのだというかたちでいろいろな発言をされていたわけです。

その時に、中村政則先生が講座派の中で何を継いでいくのかという話が出たときに、服部之総だとおっしゃった。服部之総につきまして有名な歴史学研究会の論文が出た後、関西のほうの方が自分に対する批判を述べてきた、これは別編に載せるべきかどうかというような話があった。

瀧澤　そんなことがあったのですね。知りませんでした。「掲載されたら良いな」と思って、『歴史学研究』に投稿していました。

田﨑　そのようなことがありまして。その時の著者が瀧澤秀樹先生だったのです。これには本当にびっくりしました。「之総」は三高、東大の時は「これふさ」で、「しそう」というのは門跡といいますかお寺を継ぐときの読み方であるわけです。そういった意味では、真宗の影響というものをどこまできちんと自分なりに総括というか、清算しながらマルクス主義者になったのかというのは、非常に大きな彼自身の煩悶があったと思うわけです。

同時に、先ほど吉岡昭彦先生とかいろいろな先生方の名前が出ましたけれども、彼らは大塚史学を使いながら実は服部之総の農民層分解の議論を西洋経済史に適用する、そういうかたちで戦後の地主制論争なり、その後の日本資本主義の確立の問題を提言されるわけです。

そういったものの視角の根底部分に対して「いや、服部の見方が違っている」と、「中村政則さんは表面しか見ていない」というあの論文は本当に衝撃的だったのです。あの論文の主張の背景はどうだったのでしょうか。

瀧澤　私は何人かの思想家について、その思想家の書いたものを基本的に全部読むのです。それもできれば執筆順に並び替えて全部読んで、その人の思想の形成の過程を追いかけようという努力をした人が、対象にした人が何人かいます。何人かしかいないのですが、何人かいます。そのうちの一人が服部之総なのです。

服部之総は、私にとっては歴史学者である前に真宗の大谷派なのです。最初のほうで触れた私の育った地方での背景がありますから、服部之総というのはそういう関心がありました。それとあの人の文章の魅力がすごいです。それで、私は服部之総のものは手に入る限り収集して、服部之総著作ノートみたいなものを自分で作りまして、それでずっと読んでいたのです。ワープロのない時代ですから、「著作ノート」といっても、作るのには結構苦労しましたよ。そうするとあの人の仕事の中で、たぶん量的にも３分の１ぐらいは親鸞関係が占めているのです。ところが中村政則さんも彼の論文を分類して、テーマ別に分類した論文数の表を示しながら、彼の学問体系を論ずる時には服部之総の仕事の中で親鸞、蓮如関係は完全に無視しているのです。これは違うのではないかということを言いたかった。その後で東大駒場を会場として開かれた歴史学研究会の大会会場でばったり会いまして、石井寛治さんが「あの瀧澤君だ」と言って紹介しました。実はその時が、直接には初対面でした。そしたら「いやあ、僕は宗教なんか何も分かっていないからね」と言っていたのだけれども、さすがに中村さんはその後、本格的に服部の親鸞論をやりましたよね。僕はやはり偉いなと思いました。

田﨑　それは中村政則先生についても一つの契機になったと思います。その後いろいろなかたちで唯一の講座派、最後の講座派の枠を破っていく、そういったきっかけになって

いると思います。

それと同時になのですけれども、先ほど杉原四郎先生のお仕事の話が出ましたけれども、杉原先生の河上肇論、そういったものを横目で見ながら、その段階で戦前から講座派が固守していた、32年テーゼの半封建制規定の問題みたいなものからは、先生自身はどのようなかたちで自由だったのでしょうか。

瀧澤　ちょっと今の話とずれるのだけれども、実は河上肇にも親鸞の問題があるのです。彼は親鸞について議論しています。一つは治安維持法で刑務所に入ったら宗教関係の本だけは読めるということで、読んで見たら確かに魂の琴線に触れるところがある。あのころ刑務所に入ってキリスト教になったり、真宗になったりした人が結構いるのです。

河上肇も真宗の信者になったわけではないけれども、その時に読んでみて結構感動したのです。僕は杉原四郎先生自身はそういう面はあまりなかった人だと思います。杉原先生の河上肇論は、失礼ですれども、例えば中村さんの服部之総論が到達した、宗教思想史的な面での深さみたいなものとは異質ではないでしょうか。

韓国経済研究のきっかけ

田﨑　分かりました。思想史と経済史の考察を続けられながら、1979年に有名な韓国経済史研究の総括の論文を出されるわけですね。論文自体は1979年に出ていますから研究は1978年頃から進んでいたと思いますけれども、そのきっかけは何でしょうか。例えば先生の大学院時代の友人だった高秉沢さんが不当に韓国で逮捕された。同時に1980年代前後には朴正熙（パク・チョンヒ）大統領の暗殺がありましたね。

瀧澤　高秉沢さんの事件は1974年で、朴正熙射殺は1979年10月26日です。

田﨑　1979年ですね。本当に韓国社会が激動期に入ってくる。民主化が実現するかに見えた「ソウルの春」が挫折して、光州事件を経て再び軍人の大統領が誕生する。そういった中で、一方ではNICs論みたいなものが出てくる中で、韓国経済というのが脚光を浴びてくる。そういった中で先生はどのように、いわゆる大塚史学からの日本経済史の問題から、韓国現代社会分析に入って行かれたのでしょうか。

瀧澤　時代的関係から言うと、1977年に隅谷三喜男先生が『韓国の経済』を岩波新書で出されるのです。あれは二重経済論で、僕は今ではあの議論は成り立たないと思っているのだけれども、あれの衝撃がありました。隅谷三喜男先生が韓国についてこういう研究をなされたということ自体が非常に刺激的でした。

それより何より、私は韓国に実際に行き来するようになったわけです。1974年に高秉沢君の事件が起きて1975年から行き来するようになった。でも、韓国社会について何も知らない。何も知らない日本人が韓国に政治犯救援という問題で行き来しているということには、問題がないか。やはり彼らの考えていること、特に韓国の知識人自身の考えていることを知らなければいけないのではないか、そういう脅迫観念みたいなものがありました。

韓国語の勉強も一人でしました。それで、実はそこで論文を通して出会ったのは、朴玄埈（パク・ヒョンチュ）という人なのですが、朴玄埈という人の論文を最初読んだときに、これは大塚史

学ではないかと思ったのです。大塚史学の影響が非常に強い。一つの理由は、彼らはマルクスを引用できない時代ですから、韓国の思想的状況を考えるとマルクスが公然と言えない状況ですから、大塚史学が韓国ではマルクスの代わりをしたというようになっている面があったと思います。

読んでみたら、大塚久雄先生が言っていることと同じではないかということがあって、その朴玄埈という人をはじめとした、周辺の人たちの民族経済論という理論に非常に強い関心を持ちました。最初の私の韓国研究はもっぱらそれです。甲南大学の在外留学制度を利用してソウル大学に1年行って帰って来て、1984年に出した本が『ソウル讃歌』と『韓国民族主義論序説』です。

韓国知識人との交流

瀧澤　今の話でいうと、知識人との対話を求めて韓国に行き来し始めたのは1980年代の初めです。そのころの日本と韓国との関係は今と違います。まず学問的交流からいうと、韓国の人は日本語を読めるのです。若い人も日本語を勉強して、読めるのです。本学で開催した第1回の国際シンポジウムに来てくれた李炳天さんなんかは、当時二十代後半でしたが、日本語の論文をちゃんと読んでいるのです。ところが日本人は、日本の学者は韓国の論文を読んでいないのです。読めない。

しかし、向こうは日本の研究のことは知っている。しかし、お互いの対話ということはまったくあり得ないのです。私は当時の日本から言えば開拓者です。それで例えば、エピソードを言えば、今ソウル大学の教授になった李栄薫君という、韓国経済史を専攻する安秉直先生の弟子がいます。いま彼が中心になって主張している「植民地近代化論」には賛成できないところがあるけれども、とにかくなかなかの好人物です。彼が大学院生のとき大塚久雄先生の『共同体の基礎理論』を翻訳したのです。そして翻訳したものを、私が大塚先生の弟子だというので持って来て1冊くれました。私がソウル大学校経済研究所客員研究員の資格で、研究室を提供してもらっていた時です。これを見たら著書紹介のところで大塚先生は死んだことになっているのです。何年か前に亡くなったと書いてあるのです。「ちょっと待て」と。「おれ、ここに来る前に大塚先生に電話してあいさつしたよ」「えー、最近名前見なかったから亡くなったのかと思っていました」という、それが象徴するような時代でした。

ですから、韓国の人たちも日本から、それも批判的な視点を持った韓国社会論を書いた人間が来たということになると、積極的に対話を求めて来ました。いい出会いがたくさんありました。だから、そういう意味では私は、今も韓国へ行くと若い人たちに言われるのですが、「なんであんたはこの我が国の、こんな一流の知識人たちと友達みたいに付き合っているんだ」と。そのころは私みたいな存在でも大事にしてくれたのです。

今は韓国を代表する人、例えば2000年の南北共同声明以後、その趣旨を生かした民間交流の南側代表をつとめる白楽晴さんとか、李泳禧先生や姜萬吉先生。詩人の高銀先生。そういう人たちが今でも私が行ったら喜んで迎えてくれる。お酒も一緒に飲んでくれる。

だから私自身は、日本と韓国の政府レベルの交流ではない、知識人相互の学術的交流の道を開いたという、そういう役割を果たしたという自負心を持っています。1985年に『韓国現代社会叢書』というシリーズを5冊、御茶の水書房から出しました。あの本は、両国の学術交流で、お互いに出版について合意して契約を結び、翻訳した原稿を原著者に送って点検を経て出したのですが、日韓交流において初めてだったと思います。それまでは著者の了解を得ないで、相互に勝手にやっていたのですね。しかも、あのころ韓国は著作権条約に加入していないから、やることは非合法でもなかったわけです。それをちゃんとやるようになったというのは、私が初めてだという誇りを持っています。

田崎　最初の韓国に関する著書としては『ソウル讃歌』、後に集英社の文庫にもなるわけですけれども、あの反響というのは、やはり今おっしゃった事情が根底といいますか、背景にあったのでしょうか。

瀧澤　あれはかなり日本で反響がありました。ミーハー的な反響もありました。例えば、今でいう韓流ブームの先駆けみたいな評価のされ方もありました。あの中では、流行歌の話を結構書きましたので、それが関心を呼んだ面もありました。ただ、まじめに日韓関係を考える内容も含んでいましたから、そういう点からの評価もありました。韓国のある知人からは批判もされました。「『ソウル讃歌』なんか、そんなものを書くな。見たくない。私たちは、独裁政権が支配する我が国のことを恥ずかしく思っているのに讃歌なんかするな」と言われたこともありました。だから、いろいろな評価だったのだけれども、いまだに多分私の本で珍しく出版社に経済的損害を与えなかった本です。

田崎　同時に、『韓国民族主義論序説』、また『韓国社会の転換』を出された時期というのは、韓国社会が本当に激動期に入っていくような、そういった時期だったわけですね。この先、韓国がどうなっていくのかということと、先ほど先生がおっしゃられましたように、明治以来、日本の知識人の中には「韓国（朝鮮）社会停滞論」というのが抜き難くあって、「この国が経済的にテイクオフするはずがない」というような思い込みの中で、軍事政権をどのように考えるのか、そういった問題を絡みながら、開発独裁論の理論も出てきますし周辺社会論の話も出てくるわけですね。

韓国の政治状況と研究

田崎　そういうものと絡めながら、どのように韓国社会を展望するのかということと、それから同時に、そのときには大きな問題というか、本当に全く別の国という扱いだったわけですけれども、北朝鮮社会がどんどんと国際社会の中で大きな意味を持ってくるような状況というものができるわけです。

だから、漁業船に対する銃撃問題で、日本共産党と北朝鮮が決別してしまう。それまでは主体（チェチェ）思想というか、「金王朝」と言ったら失礼ですけれども、金日成元首相に対する評価というのは知識人の中では高かったのだけれども、どうもこちらで想像しているような社会ではないらしいという、そんな情報もどんどん入ってくるような状況だったと思うのです。

瀧澤　あれが大体1980年代の半ば以降です。例えば『凍土の共和国』という本が日本で

出ているわけです。北朝鮮は実は大変な状態なのだということを書物のかたちで日本に伝えたのは、あの本辺りからです。それまでは、やはり地上の楽園であると……。「まさか、本当の楽園ではないだろうけれども、かなりいいところだろう」と私も思っていました。

東京オリンピックのときには北朝鮮の代表団が競技に参加しないで帰ってしまいましたけれども、あれはいま考えても日本政府が間違っていたと思います。そういうことまでやったときに、北朝鮮の言っていることは正しいと思っていました。今も、そういう面がないわけではない。ただ、あの国の人々の、普通の人々の生活が大変だということが分かってきたのは1980年代です。

それでも、1984年にはまだ、ソウルが大洪水になって水浸しになったときに、北朝鮮からトラック百何十台分の救援のお米を送りました。実は、あのお米はタイから買ったお米だったらしいのですが、それでもそういうことをしました。全斗煥政権は悩んだ末、受け入れるのですが、今同様のことはあり得ないでしょうね。

だから、どんどんそうなっているということでつらいのですけれども、私が韓国経済、韓国社会を勉強し始めたころは、それは主なテーマではなかった。北朝鮮に対する関心、北朝鮮研究と韓国研究はやはり分断されていました。それは深い相互関係があるから難しいのですけれども、いわば北朝鮮はアンタッチャブルな社会ということだったわけです。

私も、公に北朝鮮のことについて何か言い出したのは、たぶん1990年代半ば以後だと思います。あの国については、触れない。触れにくいし、触れない。共産党が決裂したのがちょっと早いです。朝鮮問題に関する限り、私はどうしても日本共産党の主張があまり好きになれない。言っていることはかなり正しいのです。本当のことを言っていると思うけれども、日本人があんな議論をしていいのかなという、そういう疑問はあります。

田﨑　北朝鮮の動きというものも同時にある中で、韓国の国内ではいわゆる軍事政権がしばらく続いていくわけですね。当時の事態については、どのようにお思いだったのでしょうか。

瀧澤　あくまで私は日本人ですから、国籍も民族も日本ですから、外国ですから、外国の政権に対して正面から、「あれは政権から退くべきだ」とか、「打倒しよう」とかということは言えないです。それを決めるのはその国の人たちです。ただ、心の底では軍事政権は大嫌いでした。

軍事政権のために、一番多い時で在日韓国人だけで政治犯として韓国でつかまっている人が100人もいました。そのうちの数人は死刑判決を受けました。実際に処刑された人は、後から見るといなかった。それ以前の事件では処刑された人がいるのですけれども、1970年代以後の事件では実際に処刑された人はいなかったけれども、逮捕されて立件された人が約100人です。僕のそもそも韓国への関心はその問題から始まりましたから、軍事政権の非道徳性は非常に強く感じました。

それと、時期的にも韓国が経済成長したのは開発独裁のおかげだったのだ。良くも悪くも、ともかくそれは認めようではないかという議論がいま多いのですけれども、それは朴正熙（パク・チョンヒ）政権についてはある程度言えるかも知れない。その次の全斗煥（チョン・ドゥファン）政権については、僕は全く言えないと思うのです。あの政権は本当に存在することが悪であった政権だったと思う。

その次から、また変わってきます。盧泰愚（ノ・テウ）からは変わってきます。私がちょうど一番韓国に深くかかわっていたのは全斗煥時代です。全斗煥の時代というのは、全斗煥の家族とか奥さんとかを含めて、それは、むちゃくちゃやっていた時代ですから、早く軍事独裁政権は終わってほしい、その気持ち（ユン・ボソン）でいっぱいでした。

そんなときに、中曽根総理が行って全斗煥とダンスしたりした。こんなこともありました。韓国の前大統領、尹潽善（キム・デジュン）という人が「日本も、韓国の民主化を理解してほしい」という手紙を日本政府に送ったのです。内閣責任制時代の大統領でしたが、ともあれ一国の元大統領です。そのときに、今の首相の福田康夫さんのお父さんの福田赳夫首相が「あんなものは、つまらんものだ」と言ったのです。やはり、それには私は非常に怒りましたね。

田崎　なるほど。その後、軍事政権がある意味で選挙によって終息して、誰もが考えていなかった金大中政権ができるわけですね。そのときの感想とか評価は、いかがだったのでしょうか。

瀧澤　細かい話になりますけれども、全斗煥政権が終わったその時点で金大中政権ができていたらよかったと思うのですが、あのときの大統領選挙は野党が金大中と金泳三（キム・ヨンサム）が最後まで一本化できなくて、結局、全斗煥の後継者を名乗っていた盧泰愚という人が当選したわけです。私は、あの投票の前の日まで期待していたのです。どちらかが降りるとしたら金大中さんが降りるしかない。客観的にはそういう状況だったから、金大中さんが国民のために「明日の選挙は、皆さん、金泳三に投票してください。そして、いったん軍事政権を終わらせましょう」という声明を発表するだろうと。みんな、「そんなことは、ないよ」と言っても、「いや、おれは最後までそれを期待する」と言っていたのですけれども、何も言わないで、それでその翌日、投票して負けてしまいました。投票前日にテレビが放映したのは、金大中さんの国民への呼びかけではなく、「大韓航空機事件」の犯人とされる金賢姫容疑者が金浦空港に降り立つ姿でした。

あのときには、金大中さんに非常に激しく失望して、勝手に期待して勝手に失望するのは彼の責任ではないのだけれども、それ以来、金大中さんに対するあこがれみたいなものは消えました。ただ、その後、金泳三が大統領になって、その次に彼が大統領になったときはやはりうれしかったです。金泳三も今は皆さんは悪口を言いますけれども、それなりに頑張ったのです。それなりに頑張ったけれども、本当の意味で軍事政権との決別と北との和解路線を進めたのは金大中さんだったと思います。ただし、金大中さんは、経済政策は新自由主義に乗り換えていましたから、世界中がそうですけれども、今度の盧武鉉（ノ・ムヒョン）だってそうだったのですが、それには逆らえなかったのでしょうけれども、昔、野党時代の金大中さんが言っていたこととは違う政策でした。

田崎　同時に、そのときには、NICs、NIES論が大はやりで、そういった政権のあり方と、それから北朝鮮との緊張関係の中でどのように韓国社会が進んでいくのか。同時に、東アジア社会がどのように変貌していくのか。日本や中国を巻き込んで大きな問題となった時期だったと思うのでが、そのことに対する見通しはどうだったのでしょうか。

瀧澤　NICsが言われるようになるのは既に1970年代です。それから、1980年代はNIESです。私は韓国に1年に3回かそれぐらいずつ、ずっと行っていましたから、明らかに目に

見えて韓国社会はよくなりました。貧民街はだんだん小さくなっていって、人々の家とか服装とか、非常に顕著によくなってきたし、乗用車の普及率なんかは、「これは、日本を追い越したな」という感じだったし、確かによくなった、韓国は変わったというふうに感じたのは1990年代です。実際には1980年代後半が韓国社会がテイクオフした時代です。

しかし、政治的民主主義はまだまだだったのです。私は「民主主義であろうとなかろうと、経済発展をすれば民主主義になるのだ。中産層が増えればなるのだ」という議論を、それはそのときの政権を正当化してしまうから嫌なのですけれども、客観的にはやはりそういう事実を認めざるを得ないのかも知れないという感じです。

田﨑　韓国経済の発展が、日本の伝統産業である衣料部門を食い尽くしてしまう。現在は、家電産業もほとんど韓国や東南アジア諸国に頼っているような状況になる。それが昔のような比較生産費説みたいなかたちで言えるのかどうかという議論と、そんな韓国のあり方をある意味で面白く思っていない人たちの感情も日本の社会の中であるわけです。そういったものに対して、韓国研究をするということはなかなかきついことだったと思うのですれども、その辺はどうなのでしょうか。

瀧澤　1980年代のいつごろからか、いわゆる韓国商品に対するバッシングの時代がありました。今のメイド・イン・チャイナと似ています。大体、競争相手が出てくるとそういう風潮が起きるのです。イギリスでもかつてメイド・イン・ジャーマニー問題というのがありました。今ちょうど農薬入り餃子の問題があるから、反論はしにくいのだけれども、「これは追い越されるかもしれない」という恐怖心の逆の表現です。私はそう思うのです。韓国についても、「韓国商品は度々故障しやすい」「三星の商品なんかすぐだめになる」と言っていた。そうこう言っているうちに、「三星の商品はいいぞ」となってしまいました。

田﨑　そういう状況の中で、韓国研究をする日本人研究者がどのようなスタンスで研究姿勢を保っていくのか、何を要請されるのかという緊張関係もあったと思うのです。

瀧澤　そういう時期を過ぎたら、韓国経済は本格的によくなったということが大体認識されるようになってきたら、韓国について何か聞きに来る人は韓国に対して、とにかくほめる言葉を期待してくるわけです。だから、そういうことになると、私はあえてマイナスの面を挙げて、「そういうことだけは言えないんだよ。そういう面だけではないんだよ」と言ってきたような気がします。例えば、「日本の演歌の源流は韓国にある」という議論が一時あって、私は「それは全くの嘘ではないけれども大変不正確である」というふうに言ってきたわけです。ところがその後、チョウ・ヨンピル（趙容弼）の歌が日本でよく歌われるようになって、この辺からは好意的に見ていたのです。それから、韓国の歴史ドラマ、現代ドラマ、いわゆる韓流ドラマがこれだけ日本に普及する時代が来るとは思えなかったです。私も、かなりたくさん韓流ドラマを見ましたけれども、韓流ドラマブームは、これも結論的に言えば私は肯定的に見ています。「あんなのは韓国社会の薄っぺらい、表層だけを見せている」とは思わない。なかなか深いです。全部ではないけれども、多くの場合がそうです。そういう意味ではいいのだけれども、大型本屋に行ったら必ず韓流ブームの本の隣には、嫌韓流というのが並んでいる。

田﨑　「サムスンなんかに負けてたまるか」とかの類ですね。

瀧澤　それから、台湾の人なのだけれども黄文雄という人ですが、要するに「中国や韓国はだめなのだ」ということばかり書いている人がいます。櫻井よしこなんていう人もそうです。ああいう人らも、やはり必然的に出てくるのです。

田﨑　また研究のレベルに話を戻したいと思うのですけれども、我々が大学院時代はあえてアメリカではなく日本に留学した韓国からの留学生の方々というのは、日本の日帝時代の遺産がどのように韓国の経済のテイクオフにつながっていくのかという研究を盛んにされていたというふうに思います。あえて、その部分に触れていきたいと思います。

それで、先生と共同編集で韓国現代社会叢書5巻を出されました安秉直さんは歴史修正主義者としてやり玉に挙がるような時期もあったと聞いていますが、そういった一連の流れというものをどのようにお感じになっていらっしゃったのでしょうか。

瀧澤　ある帝国主義の支配国があって、それに支配されていた地域があったら、支配している側の文化的、経済的な、いろいろな影響が支配されている側の社会をも変えていくことがあることは当たり前のことです。そして、変えていく過程の中ではすべてがマイナス面だけであるわけではない。それも、当たり前のことです。

しかし、その当たり前のことを当たり前に言うだけではなくて、我々は少なくとも支配した側ですから、まず我々の側からするべきことは、日本の支配によって植民地時代の朝鮮社会がどういう被害を被って、どういう問題があったのか。まず、その事を踏まえながら仮に肯定的な面があったとしたらこうだという話をすべきだと思う。

議論は、えてして極端な議論になってしまいます。ソウルの焼き肉屋で飯を食べていたら、ある韓国人が日本人の客を前にして演説しているのです。「日本がもう少し、あと30年間ぐらい韓国を植民地にしてくれたらよかった。そうしたら、もっと早く発展できたのだ」。そういうことを言っているのです。彼は、本気でそう思っているはずがないのです。日本人を前にしているからそういうことを言っているのです。

そういうことを言うことのほうがかっこいいと思っているのです。いつまでも、「日本の責任」と言っている人よりも、こっちのほうがかっこいいわけです。

朝鮮民族と東アジア

田﨑　そういった研究をされる中で韓国だけではなくて、朝鮮半島全体、それから当然、朝鮮民族は中国にも住んでいるわけですし自治州を形成しているわけですから、研究対象が広がるわけですね。

瀧澤　その点では、私には非常に有利な研究条件がありました。大阪経済法科大学アジア研究所と北京大学朝鮮文化研究所の共催で1988年夏に「第2回 朝鮮学国際学術討論会」が北京で開かれた時に参加し、経済部会の責任者を務めて以来、世界のコリアンへと私の人脈は一挙に広がりました。途中の経過は省きますが、その学術討論会が母胎になって結成された国際高麗学会では、1993年から北京大学の崔応九先生に続いて第2代の会長を務めました。中韓国交正常化直後の時期ですから、会長には南北何れにも属さない日本人の私が適当と判断されたのだと思います。会長を退いてからは顧問や日本支部代表を務めま

した。そのお蔭で、2度、北朝鮮を訪問する機会を得ました。国際高麗学会は南北朝鮮に支部を置く唯一の学会で、それだけに運営にあたって使う神経は大変なのですが、それをはるかに上回るやり甲斐と価値があります。最大の成果は、朝鮮社会科学院をはじめとする北朝鮮の研究者が、苦しい経済的事情にもかかわらず、暖かい人間的配慮に満ちた人達であることを知ったことですね。日本における「北朝鮮バッシング」はあの社会の実情を歪めて伝えている面が大きいと、実感しています。平壌などで買ってきたDVDで結構「朝鮮歌謡」のファンになったのですが、日本で歌う場所が少なく、不用意に歌うと変な眼で見られるのが残念ですね。その点からも日朝国交正常化の早期実現に期待するところ大ですね。

中国朝鮮族との親しい関係は、本格的には2000年からなのです。私が心臓病をやって、死なないで、それでこれから最後にどんな研究をしようかなと思っていたときに、たまたま大学院のゼミに朝鮮族の女子留学生が入ってきたのです。吉林省龍井市を故郷とする留学生でした。それが非常に大きな直接の動機です。それで、その前から延辺朝鮮族自治州へは何回か行ったことはあったのですけれども、それからは本格的になりました。

私は、非常に明確な問題意識や目的意識を持って朝鮮族との付き合いを始めたり、勉強してきたとは必ずしも言えないのだけれども、結果的には中国、韓国、日本という、この東アジアの3国の関係を後ろから見る必要に気付いたのです。例えば、朝鮮族社会から見るということは、そのさらに後ろにあるのはロシアです。だから、この日中韓、あるいは北朝鮮、この関係をもっと深く見る、後ろから見ることで立体的に見る。そんな感じを持っています。研究所の所長を辞めてもっと自由な研究時間を確保できるようになったら、最初にやりたい仕事は朝鮮族の近・現代史がどういう歴史をたどってきたかということについて、特に中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国、三つの国ができるこの過程に朝鮮民族がどうかかわってきたかということについての本を出したい。そんなふうに思っています。

比較地域研究所

田﨑　話が前後してしまったのですけれども、1997年に本学、大阪商業大学に新設された比較地域研究所の所長に就任されるわけですが、そのときの抱負と言いますか、どのように比較地域研究所というものを作っていこうと思われたのでしょうか。

瀧澤　比較地域研究所については、まず日本の中の大阪、大阪の中の東大阪という地域の問題がある。この問題については既に研究している人もいるし、その人たちに頼りつつ、私はアジアと日本、その中でも東アジアと関西、そういう視点を大事にして国際交流がやりたかったのです。最初から、所長になった時点から、韓国、日本、中国の三つの大学の共同で何かプロジェクトをやりたいと思っていました。そのことについて、私が言い出して、小田さんをはじめとして、あのときは前田啓一さんが非常に乗り気になって「三大学三付置研究所共催方式のシンポジウム」という方式を提案してくれまして、そういう態勢ができました。そして、中国はもちろん、韓国についての、それまで私が韓国との付き合

いの中でできてきた人脈とは全然、格好、肌合の違う人たちとの付き合いも始まりました。例えば、韓国でいうと、江原大学校の鄭基文先生みたいな人は韓国の民主化運動とか、統一の問題とか、およそそういうことでは名前を見ない人なのですが、会ってみたら非常にいい人ですね。そういう人たちとの付き合いで、私の韓国への関心も見方も深まり、広がったと思います。中国の場合は、それまでは私は中国の大学教授や知識人と言えば、ほとんど朝鮮語ができる朝鮮族で、そして大阪経済法科大学や国際高麗学会と関係のある人というのがほとんどだっただけれども、上海との付き合いはそういう意味では全く新しい人たちで、これこそが中国なのかも知れないという感じもしました。

私は、素直に三つの国の三つの大学、研究所、三つの民族、三つの地域が一つの仕事をするということはこんなことだということをこの研究所の国際シンポジウムで私なりに学びました。それとよかったのは、留学生たちが、力は不足するのだけれども、非常によく協力してくれました。あれは、大学の行事であると同時に留学生たちにとっては得難い勉強の機会になったのではないかと思います。

田﨑　実際のシンポジウムと、そのシンポジウムの内容を収録した紀要『地域と社会』への掲載というのがあるのですけれども、これからそれをどのような形で広げていこうと提言されますでしょうか。

瀧澤　所長が代わりますから、新しい所長にこれまでやっていたことをお伝えして、そしてこれは新しい所長を中心に考えていただくことになるでしょう。

田﨑　比較地域研究所は、もう一つの柱としまして、東アジアと大阪という大きな枠組みの中で、大阪自体をどのように考えるのかという発想もあったと思うのですけれども、そちらのほうはちょっとしばらく等二次的な扱いにされているような感じがしますが。

瀧澤　現在の研究員のリーダー格の石上敏さん、粂野博行さんと前田啓一さん、孫飛舟さんなどが頑張ってくれると思います。それぞれ着実な研究をなさっていますから、研究所の仕事として花が咲くだろうと期待しています。

知識人の役割と学問のスタイル

田﨑　これは私自身、果たして発言していいのかどうか、ちょっと迷ったところもあるのですけれども、大塚久雄先生が1992年に、政府から文化勲章をもらいます。そのときに、大塚門下は真っ二つに分かれたと言われています。あのとき先生は大塚久雄先生のあのスタンスに対して、どのような思いを持たれましたでしょうか。

瀧澤　私自身は1970年に甲南大学に就職して以来、「大塚先生の弟子」であることを誇りにしながらも、また公言しながらも、いわば東京周辺が中心の「大塚人脈」からは離れて勉強してきましたから、その当時の門下生の動きについては殆ど知りません。ただ、私個人の感情としては、大塚先生にはあの勲章は受け取ってほしくなかったです。残念でした。ただ、文化勲章というのは年金が付くので、やはりあの先生も老後のこともあるだろうし、そういうことなのかと思ったけれども、私はあの先生には拒否してほしかったですね。例えば、共産党の人でも国会議員勤続何年とか、それはもらいますね。それは、問題

ないと思うのですが、やはり、天皇陛下からもらうのはね……。

田﨑　ここで何を言いたかったのかというと、丸山眞男先生が大塚久雄先生と同じ1997年に亡くなっていらっしゃるわけです。その後、発見されたノートに、これは有名な話なのですけれども、「自分がいろいろ偉そうなことを言っていたけれども、戦前、特高につかまったときに、どれだけ学問、知みたいなものが無力だったか、それを考えると、自分はもう情けなくて仕方がない」と、そういった言葉が記されているわけです。

そういった意味では、もう学問のそれこそ知の結晶というか、哲人と言われた人たちの中でも、権力に対する弱さみたいな問題ということを抱えてこざるを得ないような状況というのはどうなんでしょうか。

瀧澤　大塚久雄先生については、例えば平賀粛学のときに抵抗していないのです。逆に、そのときに東大に入っているのです。そういうことについては、「あのとき、どうだったのですか」ということを聞こうと試みたことはあるのです。話題にしたことはあります。

だから、僕は大塚先生の学問や思想全体として見るときにはそういう問題は避けては通れないと思いますけれども、でもそこだけで見るのも嫌ですね。

田﨑　同時に、大塚先生の書物がいま岩波文庫にもう古典として収録されるようになりまして、何と『共同体の基礎理論』についての解説を姜尚中先生が書かれているわけです。姜先生というのは、いわゆるザーリンの「知識人、エリート層の社会的な役割」みたいなことを日本に紹介されていた方であって、そういう意味では姜先生ご自身の出自の問題もあると思いますが、いわゆる東洋的専制主義、偏狭的な構造の中でどのように新たな社会を構築していくのかということを一所懸命考えていらっしゃると思うわけです。

そういう状況の中で、瀧澤先生が先ほどおっしゃられた「それぞれの国の人たちがそれぞれに集まって」という話と、それにきちんと提言できる知識人、研究者の役割というものの関係軸、そのようなものはどのようにお考えですか。一方で、やはり「自分たちは選ばれた知識人として、いろいろな提言ができる」と自負や自信を持ちながら研究者というのは頑張っているわけです。それと同時にしかし、それにこもってしまって先が見えないような状況をどう打破していくのかという、常にその緊張関係、煩悶的境地にあると思うのです。多くの日本の知識人というのは、やはり最終的に知識人は特権階級である。大学の教師は、そのようなものであるというようなかたちでちょっと流されていくような向きもあると思うのですけれども。そんな状況に対して、先生が考える知識人の役割とか学問研究の位置付けというのはどういうものですか。

瀧澤　最近読んだ本で、中公新書の『丸山眞男の時代』があります。表題からは想像できないけれども、徹頭徹尾丸山眞男を批判しているのです。同感はできないけれども、非常に面白い。丸山眞男は結局、東大法学部の教授です。経済学部ではない、法学部の教授です。その上に立った、物すごい権威主義と優越感とその上に立った人だったということを克明に書いています。それを読んでいたら、「いやあ、これは認めざるを得ない」ということがいっぱい出てきます。丸山眞男ほどではないと思うけれども、大塚先生についてもそういうことはおそらくあった。丸山先生について言えば、彼は東大全共闘が研究室を襲うことを知っていて待っていたのです。

田﨑　丸山先生ですね。

瀧澤　そうです。そうなのだけれども、僕はこの本を読んで「なるほど」とうなずきながら、「では、この本を書いているあなたは何だ」ということを言ってみたいのです。あなたは丸山眞男と同じ立場だったら、やはりそうしたのではないか。そういうことを感じてしまうのです。東大の権威主義をものすごく批判しているけれども、東大の権威主義を主要な対象として批判するということは、本人も半ばその権威主義に毒されているからだと見えてしまいます。だから、僕はその批判は批判として、正当な評価はしたい。例えばある時期に、満州事変以後のある時点で戦争に対してきちんと批判しなかっただろうと言って、「あいつは、戦争を積極的に支持した」とは言えない。そういうようなことについては慎重に述べるべきだ。

韓国で最近、親日派攻撃というのは激しいのだけれども、例えばそういうところでもやられているのは、我々から見たら、日本の植民地支配に明確に批判して闘った人が晩年になって疲れて、先頭に立って抵抗運動はしない、日本を支援しようということは言わないけれども沈黙した人たちもいました。そういう人たちまで、「あいつは、あのとき沈黙したのはけしからん」と言ったら、それはやりすぎではないかと思うのです。

そういうようなことはあると思うけれども、僕は丸山さんであれ大塚先生であれ、時期が来ればそういう面も含めて、ちゃんと評価し直すべきだろうと思います。そういうところは、矢内原忠雄さんだってそうでしょう。

田﨑　矢内原先生の話が出たところなので、ついでなのですけれども、矢内原先生に糖業資本主義、いわゆる台湾の糖業の話があって、あの中ではキリスト教の近代化推進力みたいなものを非常に高く評価するわけです。侵略の側面ではなくて、未開の状況の人たちをキリスト教という力でどのように文明化した人間として覚醒させていくか、進展させていくかと考えるわけですね。

瀧澤　僕は、矢内原先生の中には台湾の先住民族に対するかなり明瞭な差別意識があると思う。それを主観的には台湾の側に立って、台湾民衆の側に立って考えているつもりになっていた。

田﨑　では、キリスト教が韓国社会の中では、人口の3分の1、もしかしたら半分近くを占めるという、そういったものが許容されるというのは、どういうふうにお考えになるでしょうか。

瀧澤　韓国では25%ぐらいです。それも、ほぼ毎週、年に20回ぐらいは教会に通っているという人の比率になると10%ぐらいでしょう。カトリックは、組織がしっかりしているから信者の数もわりと把握しやすいのです。それにしても確かに多いです。確かに多いけれども、私は韓国のキリスト教が膨張したかなり大きな要因にはシャーマニズムがあると思います。シャーマニズム的なキリスト教が多い。

田﨑　読み替えてしまっているわけですね。

瀧澤　牧師が来て、聖霊を降臨させる儀式をワーッとやって、感動して涙を流して、そういう要素が大きいです。日本のキリスト教の牧師の説教というのは、多くの場合、大学の教授の講義みたいなものです。面白くない。要因は複雑だけれども、とにかく韓国はフ

ィリピンとかベトナムとかと違って、キリスト教は支配する側の国の宗教ではなかったわけです。だから、抵抗する側の論理になり得たわけです。その点で違うわけです。だから、戦後はアメリカが来たから韓国キリスト教は帝国主義の手先になったとも言えるけれど、キリスト教の定着については、そういうふうに理解できます。

小田　私にも一言だけ発言させて下さい。学問、宗教、そういったものを包摂しながら、先生がこれからどのようなかたちで、自分の学問研究というものを新たなかたちで構築していこうと思っていらっしゃるのか。

瀧澤　私は、もう終わりです。終わってしまったとは思いませんけれども、終わりつつあるから、静かに研究のまとめを考える時間が持ちたいと思う。

田﨑　先ほど、韓国、北朝鮮、それから中国の中の朝鮮民族の、彼らによって、もしかしたらならば今、越境をする民族の移動の世界でいろいろなミニ朝鮮社会というのが世界中に形成されるわけです。そういった問題をきちんと、華僑の研究みたいなものはあったのかもしれませんけれども、朝鮮民族の研究でそういったものがあらわれていますか。

瀧澤　それは、今、次々と出てきています。

田﨑　あ、そうですか。勉強不足ですみません。

瀧澤　ええ。今かなり日本でも出てきているし、韓国でも出ています。北朝鮮では今のところたぶんないでしょう。中国でもかなり出ています。アメリカも含めて、これからもっと出てくるだろうと思います。そういう中に、私なりの協力をしたい。

Self-esteem と学問

小田　同時に、研究者としての瀧澤先生だけではなくて、生活者としての瀧澤先生が今後どのような生き方をしていくのか。

瀧澤　ノーコメントです。(笑)

小田　今までの学問研究というのは、人間臭さを避けてきたわけですね。ある意味で、自分の中の欲望とか、そういったものに対してあえて触れない。

瀧澤　でも、私の研究は割合とそういうものを見せているのではないかと思います。

小田　ええ。ですから、そういう意味では特異な研究のあり方だったと思うのです。

瀧澤　見せすぎだったのではないかと思うのです。

田﨑　それは、これからのいわゆる学問というのはこうあるべきだったという議論、学問は神聖なものだとか、学問はこうだああだというような議論と違ったかたちで、今後の学問というのは見直しを迫られていくというふうに思うのですけれども、それについてはどうお考えでしょうか。

瀧澤　私は「何かのための学問だ」と、この言葉はもう恥ずかしいから口にしにくいけれども、やはり「人類のための学問だ。それを我々は放棄してはいけない」ということ、これを、声を大にして言いたいのです。みんな、そういうことを言うと、「ああ、まだ成長していない」というふうに見るでしょう。

田﨑　もう我々の下の世代からは、いわゆる大学教師というポストに就きたい。そのた

めには、自分が何をやりたいのかではなくて、何を書けば自分が教員として採用されるのかという利害関係が表に出てしまっているのですが。

瀧澤　業績の数をどうやって稼ぐか。それは、僕らだってありますよ。ありました。今だって、ありますね。僕も学術論文を書かない期間がある程度になると焦りますよ。「あいつ、もう終わった」と思われたくないですね。だから焦ります。でも、それは基本的な動機ではないですね。勉強したり、本を読んだり、何か書こうというときの基本的な動機はそんなことではない。私の場合は、幸いに今までの論文というのは論文の本数を稼ごうとして書いてきたというよりは、気が付いてみたらこれだけ出来ていたという実感ですね。

田﨑　これからも、その研究スタイルとライフスタイルを続けていかれるということですね。それではもう時間が参りましたので、今日はご体調の悪い中、どうもありがとうございました。

瀧澤　いえいえ、こちらこそありがとうございました。

〔以上は2008年3月10日、大阪商業大学比較地域研究所所長室で行われたインタヴューの記録である〕